第43期富士見市民大学人権公

子ども食堂から考える 支え合いの地域づくり

講 師 ： 湯浅 誠 氏

平成２年
12月8日(月)
10:00～12：00
鶴瀬西交流センタ

講　師　湯浅　誠　氏

日　時　１２月８日（月）１０：００～１２：００
会　場　鶴瀬西交流センターホール
講　師　湯浅誠先生
　　全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長
受講生　５０名

１２月８日の富士見市民大学の人権講演会は、最近の新型コロナウイルス感染症拡大の中、開催も心配されていましたが、無事開催できました。

富士見市でも講演して頂いた事もあり、子ども食堂の関係者の間では著名であり、いつも笑顔が絶えない湯浅先生です。

受講生は子ども食堂の関係者が多かったですが、約１／４が市民大学の何時もの受講生でした。

講演会は冨塚鶴瀬公民館長の挨拶で始まりました。
先生の講演は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、リモートの会議も増えたとの出だしに、感染症対策としての手の消毒の仕方やマスクの効能と、身近な話から始まり、先生の話に引き込まれました。

また、富士見市の子ども食堂も頑張っているとの評価を頂きました。

冨塚鶴瀬公民館長

受付風景

感染症対策

1.コロナ禍が子供たちの見せたもの

・子どもは、新型コロナウイルス感染症には掛かりにくく他人に写しづらい
・「子どもにとっては、教育・保育・療育・医療福祉施設等の閉鎖や大人（養育者）のストレスが、小児の心身に大きな影を落としている」病としてのコロナより、コロナによる子どもの取り巻く環境の激変の怖さを、日本小児科学会の資料をもとに説明があった。

2.コロナ禍の中での活動の中で分かったこととして

・当たり前を失った今、「当たり前は有難いものである」を再認識した。
・このコロナ禍の中でも多くの人は繋がり続けようとしている。
・子ども食堂を行っている人達も、活動が重要と認識し活動しているが、どこまでやって良いかが手探りの状況である。

3.With コロナ禍の中の子ども食堂の活動

・コロナ禍でも全国の子ども食堂の数は増えている。
・子ども食堂の半数以上は活動を継続しており、従前の食堂に加え、パントリーや弁当配布等活動の幅が広がっている。
・支援の輪も大きく広がり、多様化してきている。

4.子ども食堂の変化

・子ども食堂の役割が変わってきた。
子どもが食べるところから、子どもを核として多世代が集う場所に変わってきている＝多世代交流型。
・多世代交流型では、孤独や孤独感をいやす場所としても認識されている。
・多世代交流型では食や中身に余りこだわりがないので、自治会の参加、通いの場（老人サロン等）の多世代化。お寺の参加等でその数が増えている。
・子ども食堂に事業者の参加も増えている。
その理由として、事業者にはガイドラインがあり活動の対して安全と安心感が担保されている。

5.無縁社会での位置づけ

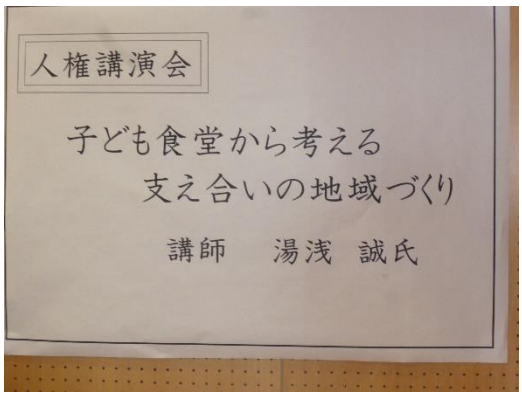
・人間関係では、課題解決型と繋がり続ける人間関係とがある。
・繋がり続ける人間関係とは自治会活動やサークル活動、子ども食堂等の活動がある。
・無縁社会が誘発する「生きづらさ」を解消するのは、課題解決型の人間関係でなく、繋がり続ける人間関係である。子ども食堂もその一翼を担っている。

６.まとめ

個人が中心の子ども食堂では感染症対策のガイドラインが無いので葛藤が絶えないので、厚生省や日本小児科学会等と連携し子ども食堂のガイドラインが作成中で、１２月２３日に発表する予定である。

最後に、瀬戸理事長の締めの挨拶で終わりました。

瀬戸理事長



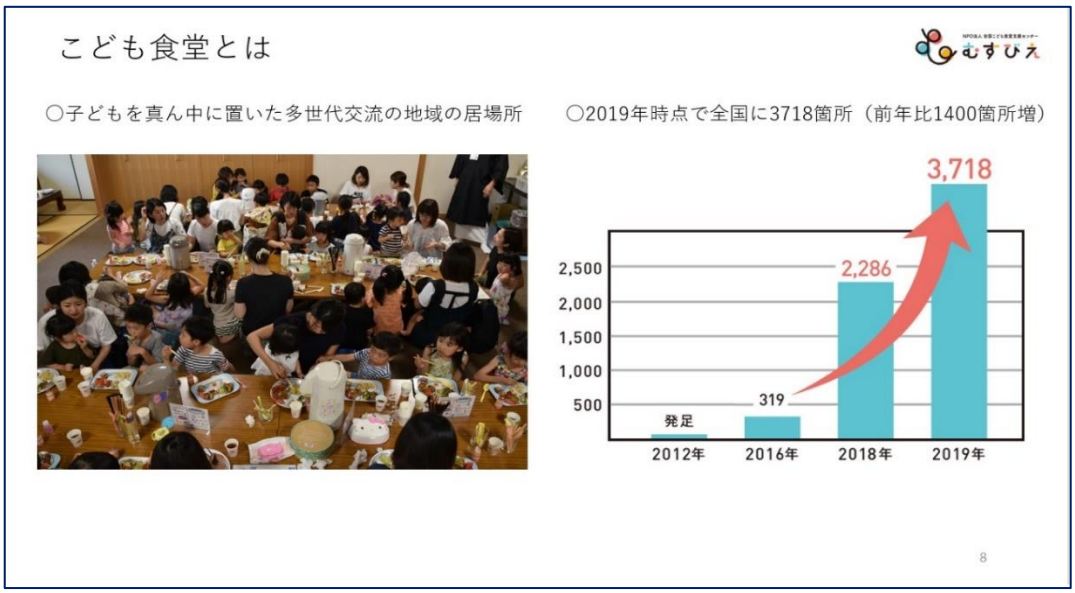
講演会では質疑応答が無かったですが、講演会の後で湯浅先生と市民大学の何時もの受講生の方が話されていたのが印象的でした。

なお、このガイドラインは先生に予告通りに「子ども食堂向け新型コロナウイルス感染症対策・安心安全自己点検シート」として発表されました。
次のアドレスで確認してください。https://musubie.org/news/2889/

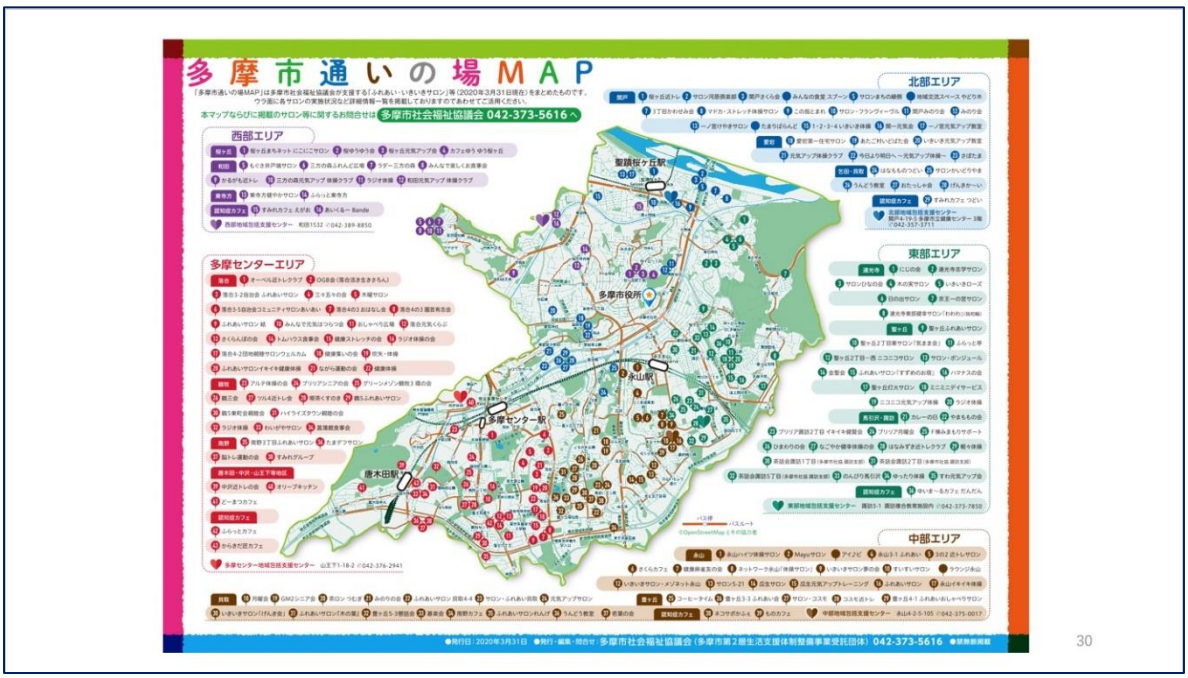
講座説明用パワーポイント

1. 子どものCOVID－19

2. 子ども食堂とは

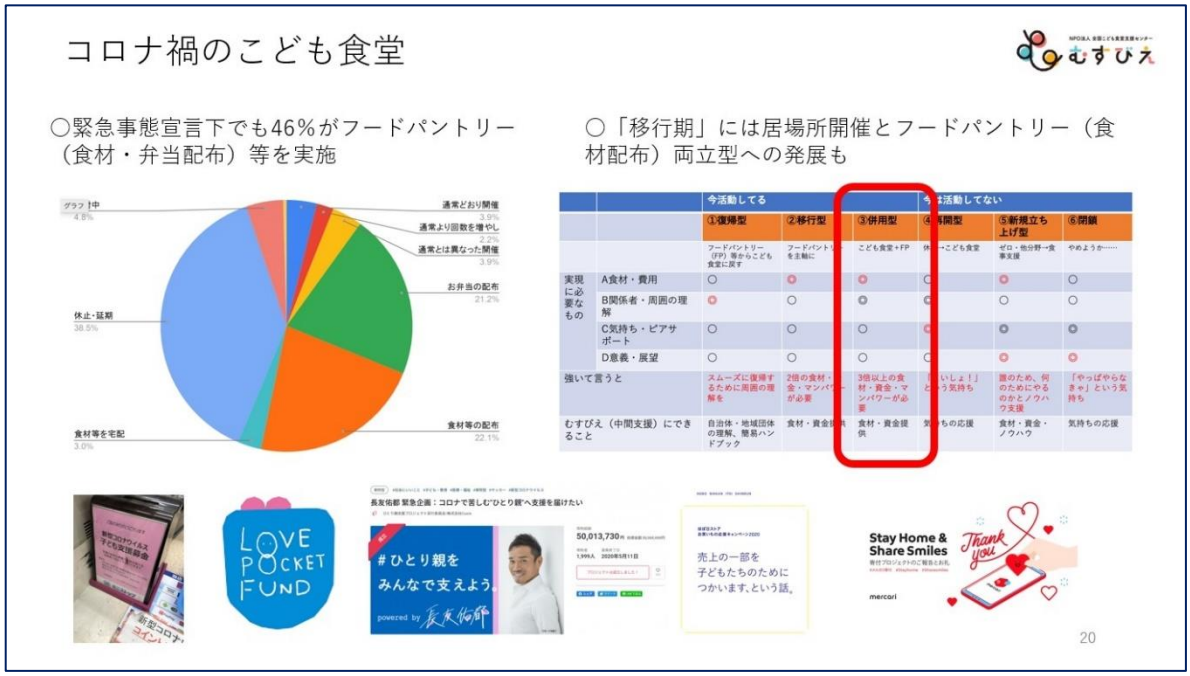


3. 多摩市通いの MAP

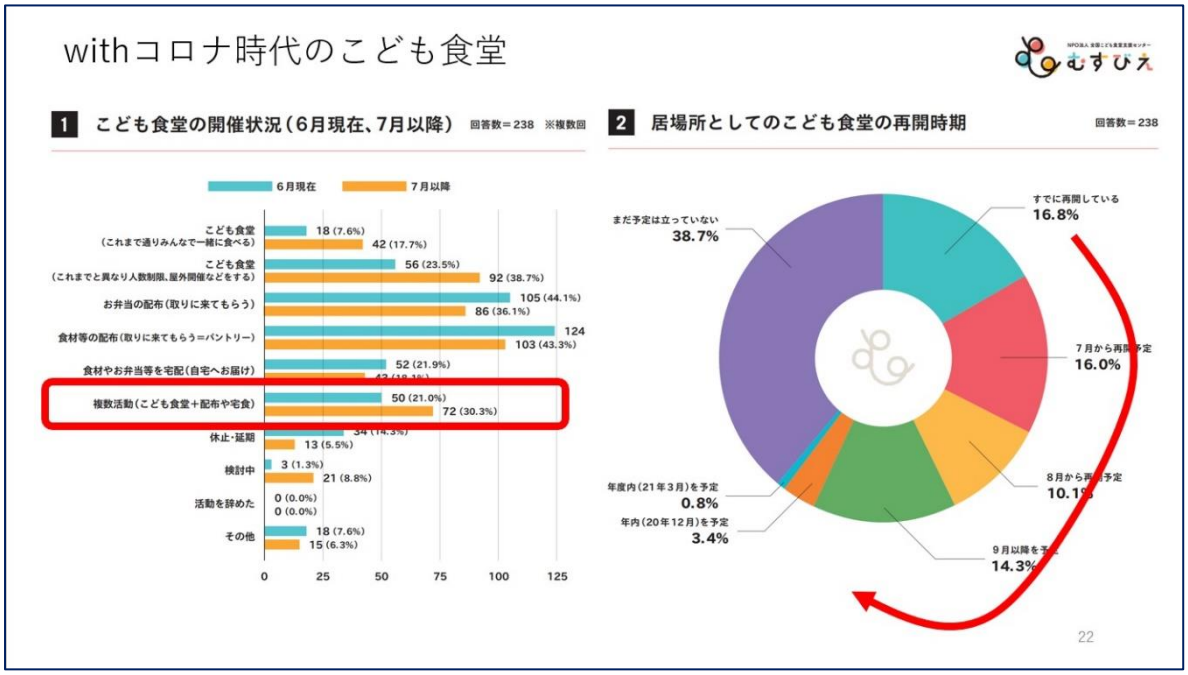


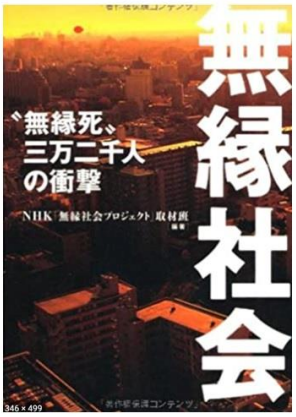
4. コロナ禍の活動

5. コロナ禍こども食堂



6. With コロナ時代のこども食堂



7. 無縁社会が誘発する「生きづらさ」への処方箋

無縁社会が誘発する「生きづらさ」への処方箋として